

生物多様性の保全に資するような民間等による保全事例

国立環境研究所 気候変動適応センター

西廣 淳

保全が二次的目的である例

麻機遊水地「自然再生事業の一環／福祉・教育活動の結果としての保全」



福祉水田の造成と生物多様性

開田前

カササゲ、サデクサ、クサヨシ、ゴキツル、ヘクソカズラ

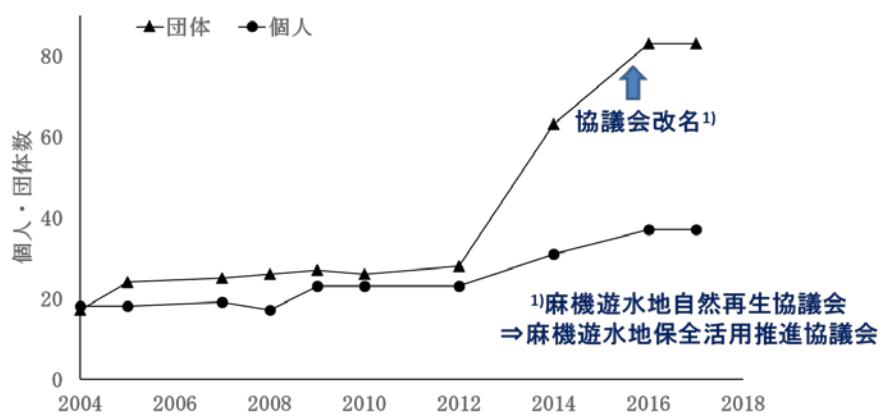
福祉水田耕作後

イグサ、イヌビエ、イボクサ、ウキゴケ、ウスゲチヨウジタデ、オオイヌタデ、キカシグサ、クサネム、ケイヌビエ、コウガイゼキショウ、ヨシ、コメガヤツリ、コセンダングサ、コナギ、サデクサ、ヒメガマ、シャジクモ、タカサプロウ、タケトアゼナ、タコノアシ、タマガヤツリ、チヨウジタデ、ハリコウガイゼキショウ、ヒデリコ、ホソバノウナギツカミ、ホソバヒメミソハギ、ミズハコベ、ミズマツバ、ミソハコベ、ミルプラスコモ、ヤナギタデ、ヤノネグサ

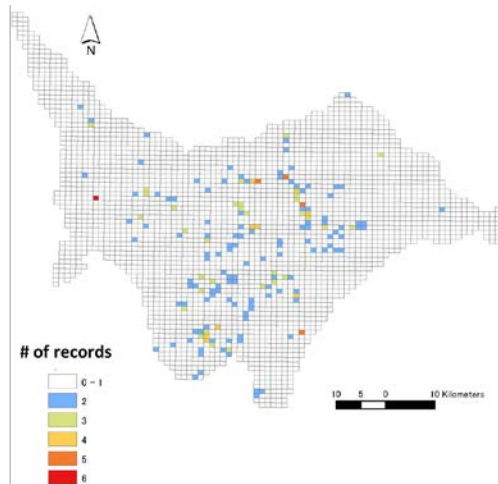
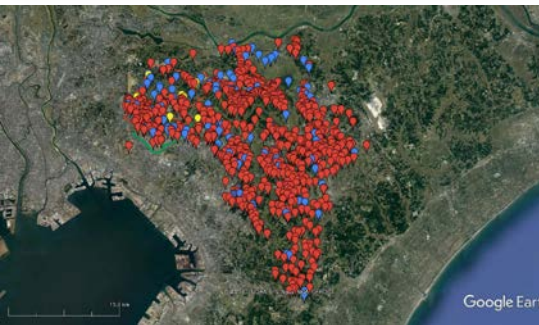
福祉水田での植物相調査：多様な湿地性攪乱依存植物 RDB種5種（シャジクモ、ミルプラスコモ、タコノアシ、ミズマツバ、ウスゲチヨウジタデ）を含む35種

生産した米は地元企業が買い取り。

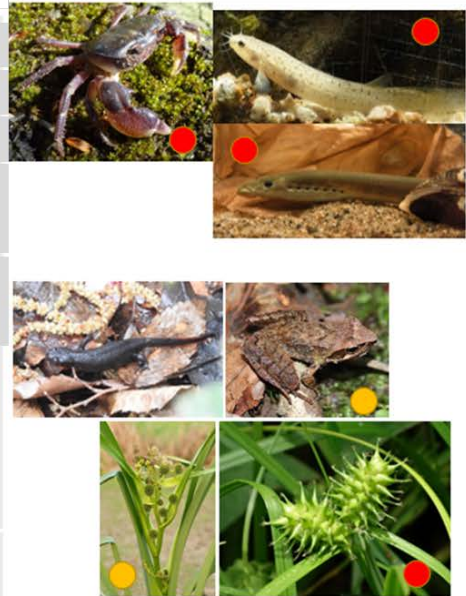
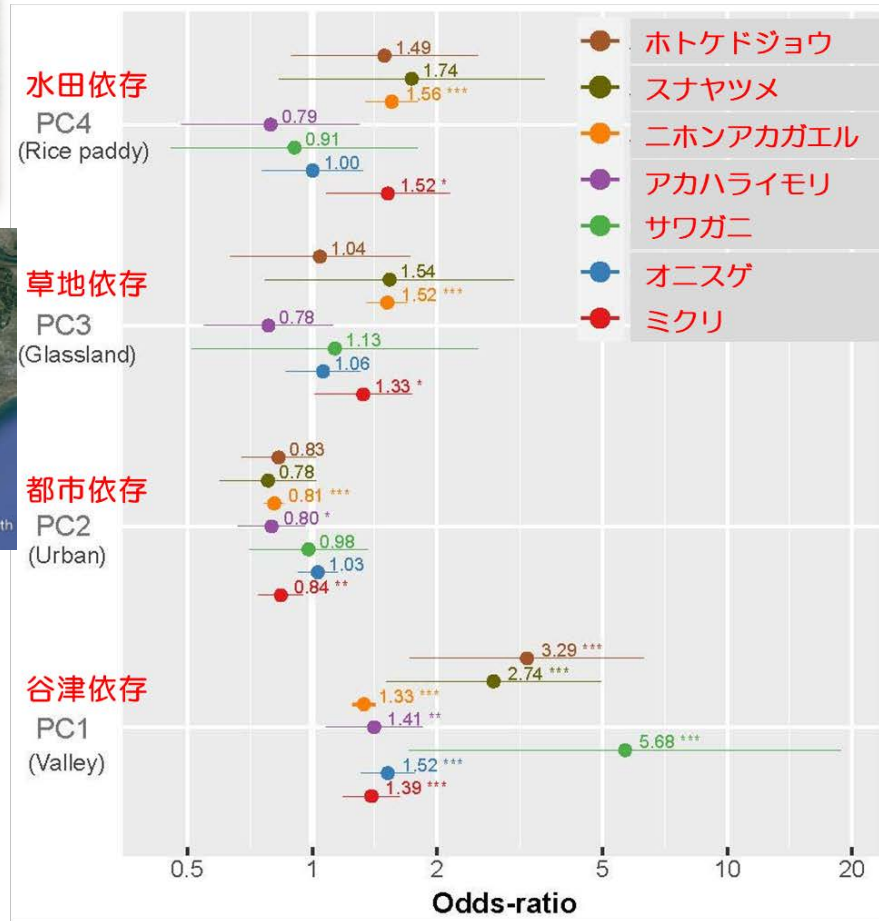
自然再生協議会 参加者の増加



保全を目的としない例 印旛沼流域の谷津の遊休農地



地域絶滅危惧種の谷津環境への依存性



谷津は、ホトケドジョウ、スナヤツメ、ニホンアカガエル、アカハライモリなど絶滅危惧種にとっての主要な生息地

(Kim et al. 2020)

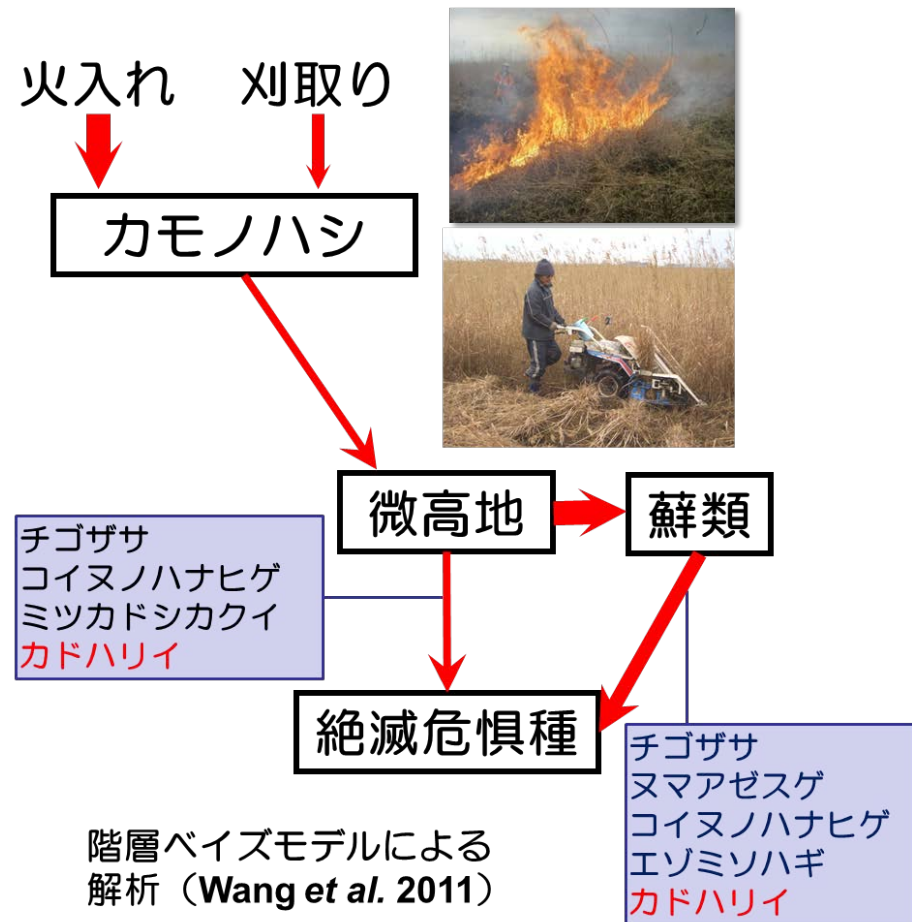
保全が二次的目的である例 印旛沼流域の複数の谷津（市民団体等による湿地の自然再生）



保全を目的としない例

霞ヶ浦 妙岐の鼻「茅場の管理の結果としての保全」

- 霞ヶ浦湖岸にある約52ha の湿地
- 12種のレッドリスト植物が生育
- 一部で「しまがや」(カモノハシ)の採取・利用(財産区管理の萱場)
- カドハリイ(CR)は茅場のみに生育

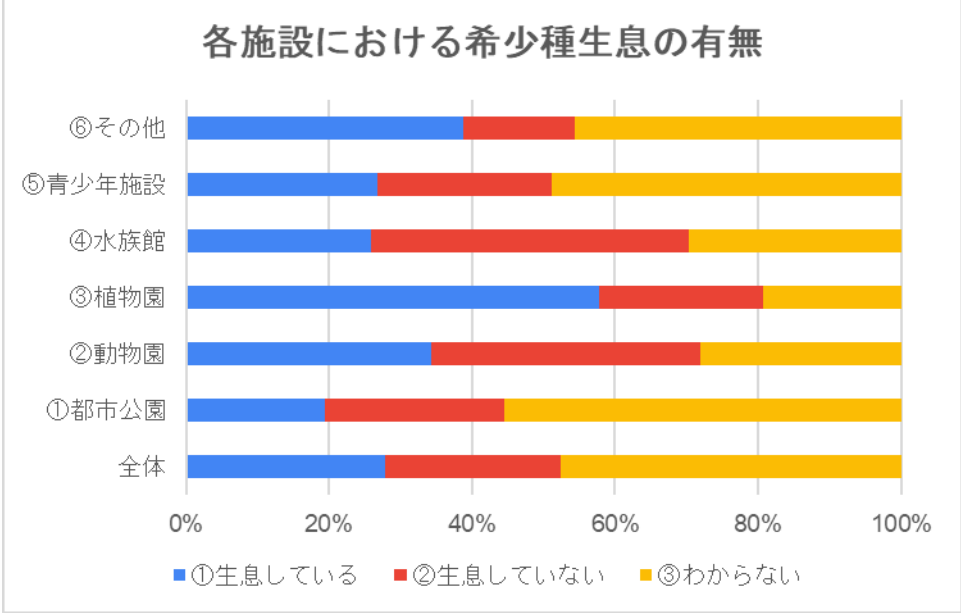


国立環境研究所から提供できそうな情報

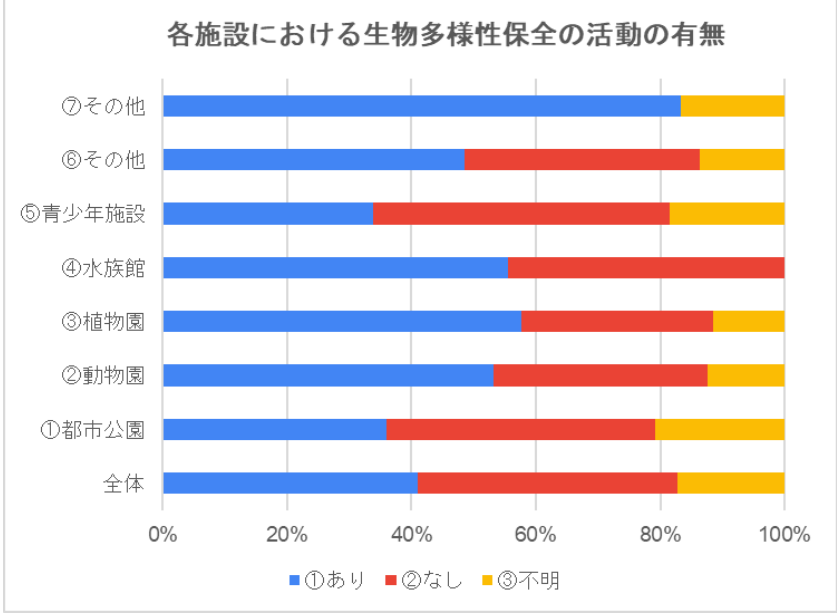
「潜在的な民間保全・保護地域情報の収集業務」報告書より 担当：角谷拓（日本自然保護協会と共同）

対象とした施設：青少年施設、大型児童館のうち野外活動を行っているところ、県立都市（総合）公園、国営公園、自然史系博物館、動物園水族館、植物園、県立森林公園、農業公園、自然観察の森、ろうきんの森（以上 約2000件）。

アンケート調査：自然観察会の実施、その他の環境教育・普及啓発活動、生物多様性保全活動の有無、自然観察指導員の活動の有無、年間利用者数、敷地面積、RDB種



角谷ほか 未発表



角谷ほか 未発表